Ⅰ　出羽三山「七大御秘所〖神秘の解剖実査〗」

～　聖地・秘所の現地踏査（参詣抖藪（とそう））記録　～

	管理番号	件名	頁
上	―――	はじめに／全体像（概要・共通的事項）	1 ～13
中	①	（羽黒山）阿久谷（あこや）	14
	②	三鈷沢（さんこ）	15～28
	―――	三鈷沢抖擻の補足・補完資料	29～45
	③・④	（月山）東西補陀落（ふだらく）	46～53
	⑤	湯殿山本宮（三山総奥の院）	54～71
	⑥	荒澤寺（こうたくじ）（羽黒山総奥の院）	72～76
	⑦	羽黒山御本社（現三神合祭殿）	77～80
下	―――	おわりに	81～82

（註）図表番号は各件名に付定・完結とした。

【　はじめに　】　全体像（概要・共通的事項）

羽黒山・月山・湯殿山の出羽三山は、古来より修験道・山岳信仰の聖地と云われ、西の伊勢神宮に詣でることを(※)「西の伊勢参り（陰陽の陽の気)」といい、東の出羽三山に詣でることを「東の奥参り（陰陽の陰の気)」と称し、双方を詣でること－－－陰陽合一を図ること－－－によって、初めて重要な人生儀礼を通過する、神仏のご利益・ご加護が確かなものになるのだ、と云われて来ました。

(※) 元は陰陽二元相対(待)原理にあり、陽は太陽、陰は月（月陰）に照応されています、太陽信仰の中核となる天照大御神を祀る伊勢神宮、および、月信仰の中核となる月読命を祀る月山神社が信仰を集めたことに由来します。

同三山は、登山者にとっても、何がしかの信仰心を持っている人にとっても、あるいは、信仰心の有無に係らず聖地と崇め祭り、行きたくなる所が沢山あります。

同三山信仰について、歴史を探れば誠に面白い点が山ほどあるが、歴史の面、学術の面から多数の専門書籍が発刊されており、私の及ぶ処ではないので、専門的な知識に深入りすることなく、私の視点から関心・興味が強まった処の要点を取り上げて整理して見ました。

次ページに記載のとおりの私が名付けた「出羽三山　七大秘所」―――出羽三山神社関係者が七大と公称しているかどうかは分かりません。―――を取り上げ、実際に現地に足を運んで参拝したことから整理しました。

ついては、まずはそれらを楽しむために共通的、初歩的な知識に係る事柄を纏めて見たのが、本稿であります。

同三山の信仰のあり方を思う時、地理と方向観も必要であり、古神道や密教（仏教）や道教や陰陽道や易経(えっきょう)や陰陽五行説などと習合し熟成されて来た歴史に鑑み、それらに係るものの要点を記載しました。現在（現時）のことには殆ど触れず、主に神仏習合（神仏混交）時代―――概ね江戸時代までのことについて取り上げた内容になります。

標高では断トツの月山、高さ・図体(ずうたい)では一番目立つ月山、しかし、あまり秘密・秘匿の秘所性を感じない月山、あえて言えば八番目（８番目）の聖地というべき月山ですが、月山を別立にして記述します。まずは、月山抜きです。

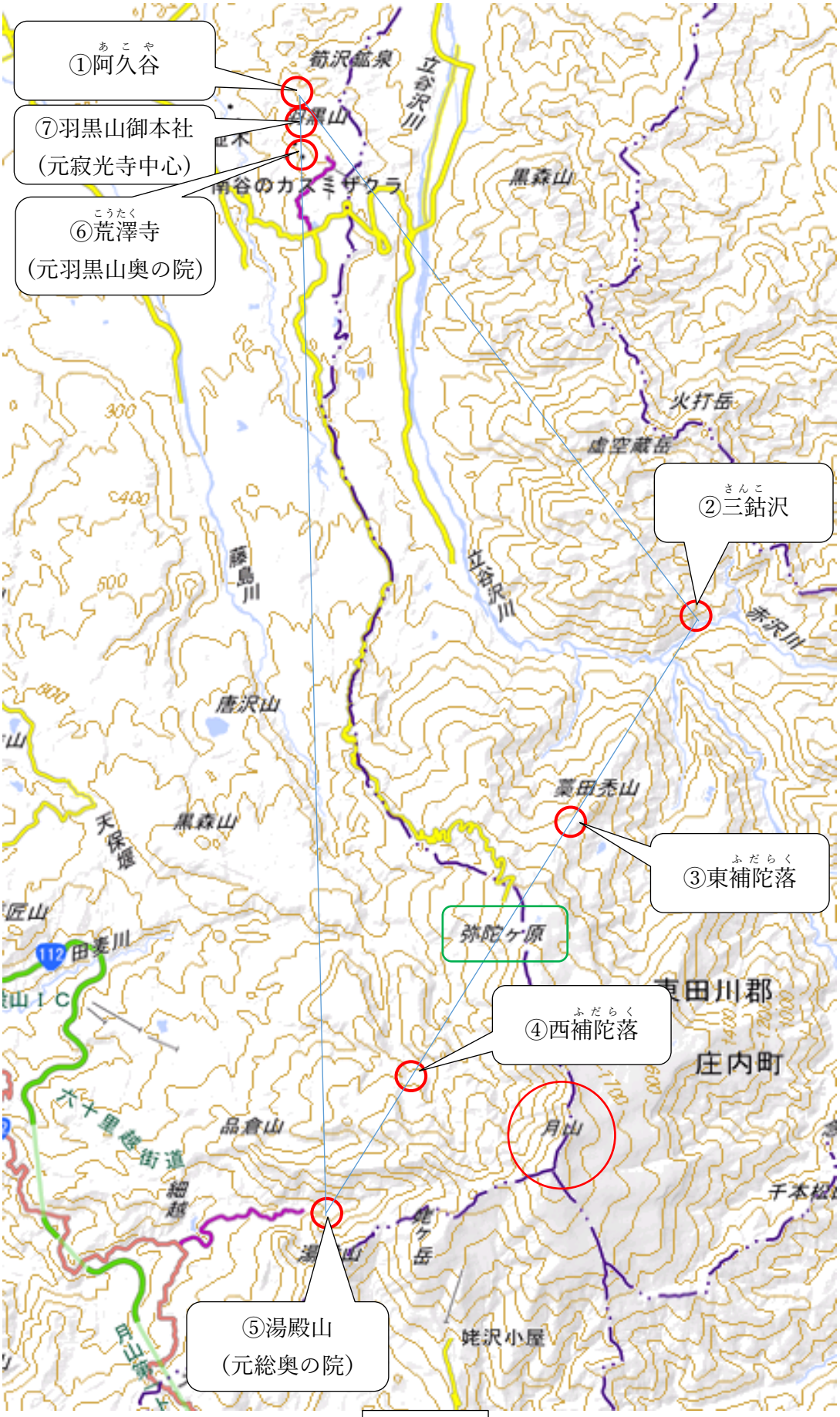
・・

参考文献がある場合はその都度明記するが、本書の記述においては私見を取り入れて加筆補正（編集）しています。

出羽三山に関する書籍は山ほどありますので本書以外はそちらに譲ります、そのような既存本に捉われない私の直接体験を踏まえた独自色を強く意識して記述します。本書は私の実地踏査を踏まえた私見です、私の浅学菲才なるが故の狭量視野で記述していることから、間違いや錯誤が多々あるはずですが、私の能力では如何ともし難く、読み手の懸命な明晰頭脳を以って想像し自由に解釈してください。

１．秘所の位置関係

出羽三山の七大秘所の位置関係は図－１のとおりである。この山塊領域には、今だに一部の修験者・山伏しか立ち入れない――秋の峰入りは、神社系出羽三山神社によるものと、仏教系荒澤寺正善院によるものが行われている――とする禁則地、秘所の地がある。しかし、秘所と言われると、行きたくなる、見たくなるのが人情と言うもの。


①阿久谷
⑦羽黒山御本社
（元寂光寺中心）
⑥荒澤寺
（元羽黒山奥の院）
②三鈷沢
③東補陀落
④西補陀落
⑤湯殿山
（元総奥の院）
筋沢鉱泉
立谷沢川
黒森山
南谷のカスミザクラ
火打岳
虚空蔵岳
赤沢川
藤島川
唐沢山
栗田秀山
天保堰
弥陀ヶ原
東田川郡
庄内町
月山
品倉山
六十里越街道
細越
鉈ケ岳
蛇沢小屋
千本松
112
田麦川

図－１

そこで、中でも七大秘所地―――

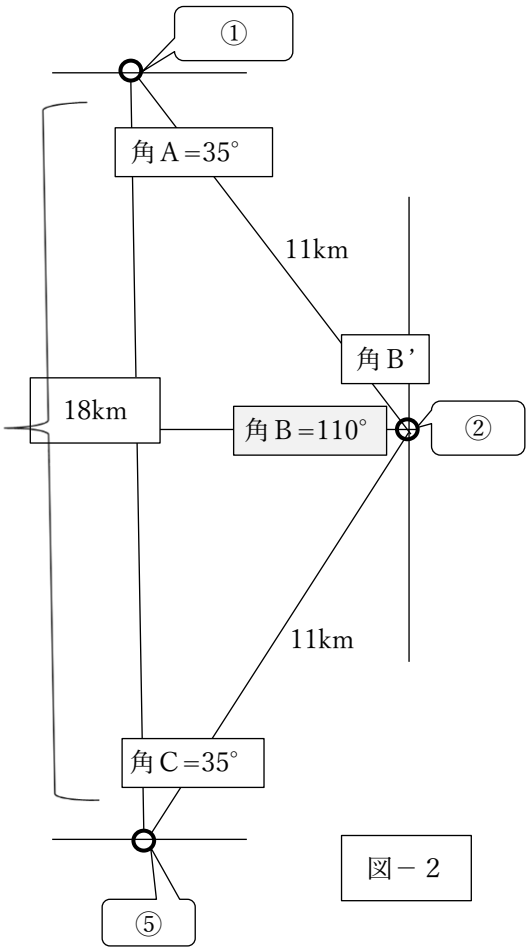
①阿久谷（あくや）
②三鈷沢
③東補陀落
④西補陀落
⑤湯殿山（出羽三山の元総奥の院）
⑥荒澤寺（元羽黒山奥の院）
⑦羽黒山本社（元寂光寺中心施設）

の７個所に焦点を当てる。
①は能除太子の開山に向けた最初の修行地であり、
②は開祖能除太子最後の修行地とされた最奥の秘所である。
③と④は密教金胎両部界曼荼羅を投影し、前者は上方に向かう男根状立岩がある金剛界、後者は下方に向かう女陰状横岩がある胎蔵界と見立てる。
⑤は岩そのもの（噴泉塔）を御神体とし、同三山の総奥の院と言われた。
⑥は羽黒修験の不滅の「常火」を守り続けたことにより羽黒山奥の院と云われた。
⑦は羽黒修験の本山とする「寂光寺」（一山）の中心施設であった。

さて、①②⑤の地点を直線で結ぶと二等辺三角形を形成する。各秘所は各辺直線上に連なっている。羽黒山阿久谷①と湯殿山総奥の院⑤は南北の垂直線上にあり、これは、陰陽五行の子午線上に重なる。阿久谷①と三鈷沢②は相対的に東南・西北の位置関係にあり、三鈷沢②と湯殿山奥の院⑤は相対的に西南・東北の位置関係にある。

２．二等辺三角形の角度
３辺の概算距離は図－２のとおり。位置関係を踏まえ、方角度を計算（概算）してみると以下のとおりとなる。
角Ａ≒角Ｃ　とし、
「　余弦定理$a^2=b^2+c^2-2\times b\times c\times \cos A$　」を適用し角度を求めてみる。
$11\times 11=(18\times 18)+(11\times 11)-2\times 18\times 11\times \cos A$
$0=324-396\times \cos A$
$\cos A=324\div 396=0.818$　　$A=\cos^{-1}0.818\fallingdotseq 35$度
したがって、角Ｃ＝角Ａ＝35度、角Ｂ＝180－（35×2）＝110度　となる。　110度÷2＝55度
したがって、角Ｂ’＝90－（110÷2）＝35度となる。
「平行線の錯角は等しい」から角Ａ＝角Ｂ’でもある。
110度や35度には何か意味合いが隠されているような気がするが、解読出来なくている。

３．広域視観



図－２

さて、内藤正敏氏はその著書「修験道の精神生活」「第二章　出羽三山・マンダラ論」の中で、広く鳥海山、葉山、摩耶山、母狩岳、金峰山まで広げて論評している。

特に出羽三山圏域に係り、とても興味深い処があったので参考に私見を入れて整理する。

阿久谷から湯殿山に至る南北軸は、羽黒三所権現の思想と深い係りがあり、聖観音を中尊とし、妙見菩薩（北極星または北斗七星の神格化）と軍荼利明王（南十字星の神格化）を脇侍とする三尊仏とする。

よって、宇宙の中心に存在する太陽を、星辰―――（※1）北極星　と　（※2）北斗七星―――ならびに、（※3）南十字星を以って北と南から守護する配置・構図を取っている。

聖為る南北線（子午線）は、月山と鳥海山との関係にも見られる。月山山頂のお室（月山神社）も、羽黒山頂の本社も、現在も北方を拝むように配置・建てられている。月山と鳥海山の位置関係は自然の地形であるが、神社建物の配置の向きは人工的、人間の意図を反映したものである。仏法の核心世界は、西（真西）の「西方極楽浄土（阿弥陀如来の世界）」と、東（真東）の「東方浄瑠璃浄土（薬師如来の世界）」と言われる中で、真西と真東を外しているのは、あえて北方信仰に基軸を置いた意図があって意識的に配置したものと思われる。それらは、北方重視思想の密教と結び付いているのだろう。

（※1）北極星は天の北極にあって不動の位置にある。北極星を神霊化し最高神「太一・太極」、天帝（天皇大帝）の住む場所と云われた。

（※2）北斗七星は北極星を中心に、１時間に15度（360÷24）ずつ動き、一昼夜（24時間）でその周りを一回転し、一年でその柄杓（ひしゃく）の柄（え）は十二支方位（360度／全方位）を指す。杓（しゃく）は北極星を向く。したがって、北極星と北斗七星は動かぬものと動くもの、それは『天帝とその乗り物』と意識された。

（※3）北極星と対極にある南十字星は南半球では最も目立ち、天の南極付近で輝いているが、日本の本州（北半球）から全景を見ることは出来ない。天測航海の際には、南半球に入って北極星が見られない場合の目印となった。

【 参 考 的 事 項 】

１．同三山の開山縁起について、

その１；羽黒山側では、能除太子（蜂子皇子）の開基とする。崇俊天皇の皇子であったが、容貌怪異で皇位に付くことは出来ずに諸国の旅に出た、―――貴種流離譚（きしゅりゅうりたん）の英雄である源義経に類似―――船で鶴岡の由良に着き、３本足の大鳥に導かれ羽黒山に分け入り、羽黒山の阿久谷（あこや）（「あくや」ともいう）に至り開山した。引き続き修行の末、月山、湯殿山をも開山(593年)した、としている。後年は天台宗を信仰・教義の基軸として来た。

その２；図－３は第50代羽黒山別当の天宥筆「開山御尊像―――脇侍（わきじ）は金剛童子（向かって左側）と徐魔童子（向かって右側）―――である。

その３；一方、湯殿山側は、弘法大師は空海の開基とする。空海は船で酒田の宮ノ浦に着き飯盛山に登ると、赤川上流からアビラウンケン胎蔵界大日如来の梵字が光明を発しながら流れて来たことから、その方向の梵字川上流に分け入り、湯殿山に至り開山(807年)した、としている。この年は丑年でそれが御縁年になったとしている。真言宗を信仰・教義の基軸として来た。

図－３

２．羽黒側と湯殿側の対立

湯殿山の支配権・祭祀権を巡って、羽黒・湯殿の両者が抗争し、その戦いは160年間―――単純には1792(1791+1)－1630＝162―――にも及ぶ長い抗争があった。訴訟ではいずれも湯殿山側の主張が認められて来た。その骨子について、内藤正敏著「日本のミイラ信仰（法蔵館）」等を参考に、江戸期における両山の対立に焦点を当て、経過の概略を図(表)－４にした。

年次(年)	動　き	備　考　（背景）
寛永7(1630)	宥誉（ゆうよ）（後の天宥（てんゆう））が羽黒山第五十世別当に就任	宥誉25歳、現在は西川町吉川の安中坊の出自（岩根沢との説もある）と云われる。 増強する湯殿山勢力に対し羽黒側の支配下に置くことを画策した。
寛永16(1639)	宥誉は江戸幕府寺社奉行に第１回目の提訴 （湯殿側勝訴）	湯殿山は本来羽黒山末（一山の配下）である、と主張した。

寛永18(1641)	宥誉はその名を天宥に改めた。	江戸は東叡山寛永寺に赴き、徳川三代側近の天台宗天海大僧正の弟子となった。顕教・密教・禅宗等の諸宗混在の羽黒山一山を天台宗に改宗・帰入・統一した。
寛文５(1665)	天宥は第２回目の提訴（湯殿側勝訴）	湯殿山４ケ寺(本道寺、大日寺、大日坊、注連寺)は羽黒側末（配下）に入るべきである、と主張した。
天明６(1786)	湯殿山４ケ寺は「湯殿山法則」を高札(建札事件)	✓湯殿山は空海開基の真言宗である。 ✓湯殿山奥の院支配権は湯殿山別当４ケ寺である。
寛政３(1791)	羽黒山が第３回目の提訴 双方示談 （実質湯殿側勝利）	・湯殿山別当は４ケ寺である。 ・羽黒側は湯殿側への入る場合は真言宗法流による。 ・先の高札は撤去する。
明治元(1868)	神仏判然(分離)令宣告	戊辰戦争
明治３(1870)	羽黒山は神の山	神祇官通達
明治４(1871)	湯殿山も神の山	〃

図(表)－４

羽黒修験も湯殿山奥の院に駆けることが可能であり、その際は、湯殿側の入会行法（真言宗法流）に従った。江戸幕府は「寺院法度（幕府が仏教寺院，僧侶を統制するために発布した一連の法令)」により、修験（寺院）を本山派（役小角を宗祖、京都の聖護院を本寺とし、熊野三山を拠点とした天台宗系一派）と、当山派（聖宝を宗祖、京都の醍醐寺を本寺とし、吉野金峯山を拠点とした真言宗系一派）の二大勢力のいずれかに属するように整理したが、当初同三山はそれらに属せず公認された修験ではなかった。その後天宥による羽黒一山の天台宗統一を踏まえて、地方修験の本山として幕府から認められた。天宥は現在に至る羽黒山参道の石段や杉並木を整備したが、湯殿山との論争に敗れ、庄内藩との軋轢等もあり、結局は、伊豆新島に流刑になり、延宝２(1674) 年に82歳の生涯を終えた、という。

明治維新後の紆余曲折があって、ようやく落ち着き今日に至っている。

３．著名文化人の出羽三山詣で紀行

笹沢信責任編集の「出羽三山紀行文学集成（一粒社)」には、同三山に参詣した多くの文化人21名の紀行文・記録を掲載しており、次のとおりである。私がきちんと名前を知っているのは12人（氏名の頭部に✓印）である。

˘松尾芭蕉（1644～94、江戸前・中期の俳人）―――˘河合曾良（1649～1710、江戸前・中期の俳人)、˘古川古松軒（1726～1807、江戸後期の地理学者)、˘高山彦九郎（1747～94、江戸中期の勤王家)、˘菅江真澄（1754?～1829、江戸後期の国学者・紀行家)、˘十返舎一九（1765～1831、江戸後期の戯作者)、田山花袋（1871～1930、明治・大正期の小説家)、河東碧梧桐（1873～1937、明治・大正期の俳人)、日下部四郎太（1875～1924、明治・大正期の地球物理学者)、˘斎藤茂吉（1882～1953、大正・昭和期の医師・歌人)、荻原井泉水（1884～1976、明治・大正・昭和期の俳人)、吉田絃二郎（1886～1956、大正・昭和期の小説家・随筆家)、横山利一（1898～1947、昭和期の小説家)、和田秋兎死（1903～91、昭和初期の俳人)、˘真壁仁（1907～84、大正・昭和期の詩人・評論家)、˘井上靖（1907～91、昭和期の小説家)、武田泰淳（1911～76、昭和期の中国文学研究家)、近藤侃一（1911～76、昭和期の作家)、˘岡本太郎（1911

～96、昭和期の洋画家)、ˇ森 敦（1912～89、昭和期の小説家、芥川賞)、ˇ藤沢周平（1927～97、昭和・平成期の作家）

歴史上の著名な人が沢山来たが、それだけ信仰の対象としての偉大性を感じる。本当は、その全てについて同三山に実際に足を踏み入れた年月を整理したかったが、同書籍に明確に記載されていないために名前のみを列挙した。その中で３人について次に触れて見る。

（ａ）松尾芭蕉

芭蕉は、図(表)－5のとおり、弟子の曾良とともに出羽三山には計８日間滞在した。出羽三山神社監修の「出羽三山史」等を参考に概略を下表にした。日毎の記録は芭蕉に随行した曾良の日記の方が細部に亘っている。

この間に読んだ俳句の主なものは次のとおり。

・有難や雪をかほらす南谷　　（於　起居の拠点南谷）
・涼しさやほの三か月の羽黒山　　（於　羽黒山）
・雲の峯いくつくづれて月の山　　（於　月山）
・語られぬ湯殿にぬらす袂（たもと）かな　　（於　湯殿山）

図（表）－５	
年次(年)	動　き
元禄２(1689) 旧３月27日	門人曾良を伴い江戸は深川を出立した。(新歴5月16日)
旧６月３日	羽黒山手向に到着、南谷（別当寺別院）を起居の拠点とした。(新歴7月19日) 別当執行代の会覚阿闍梨に謁見した。
旧６月４日	本坊で俳諧の連句（歌仙）の会を催した。(新歴7月20日)
旧６月５日	断食・潔斎の後、首に七五三を掛けた白衣の道者となり、御本社羽黒権現に参拝した。(新歴7月21日)
旧６月６日	東補陀落往復、月山登頂、月山大権現を参拝し、ここ山頂の小屋に宿泊した。(新歴7月22日)
旧６月７日	湯殿山権現に参拝し、月山経由で、南谷別院へ戻った。(新歴7月23日)
旧６月８-９日	２日間は休息と、別当との歌仙を開いた。(新歴7月24・25日)
旧６月10日	羽黒を出発し、鶴岡へ向かった。(新歴7月26日)

（ｂ）高山彦九郎

江戸中期の勤王家、林子平・蒲生君平とともに寛政の三奇人の一人と言われた。諸国を行脚した、今でいう大旅行家は勤王思想を提唱し普及に努めた。寛政２(1790)年新暦７月に出羽三山にも来て、その記録を「北行日記」に詳しく書いている。「西川町史　上巻」を参考にすると、この時は、現朝日町の大沼大行院→（道智道）→本道寺→志津→（玄海－石はね沢－装束場）→湯殿山→（装束場）→月山→羽黒山→手向の行程となっている。この時、志津の少し先の玄海を過ぎた所にあった図（表）－6のような立札（板札）を記録している。なお、括弧内は私訳である。

図（表）－６
覚 一　従是奥におゐて小虫等に至る迄も殺生無慈悲の作業可慎事（これから奥に入っては、子虫に至るまで殺したりするような無慈悲な行動は慎む） 一　禅定（ぜんじょう）の道筋竹木狸（たぬき）に苅払等　仕（つかまつり）間敷（まじく）事（これからは神仏修行の身の上であり、草木を刈り払ったり、動物を追い払ったりは決して行ってはいけない） 一　女人並比丘尼入へからさる事（一般の女、出家したと雖（いえど）も女は、この山に入ってはいけない） 一　道法（みちのり）丁数等計るへからさる事（道筋の距離を測ってはいけない） 一　万端（ばんたん）本山先達の差図守るべき事（この山に入ってからの全てについて、ここ本山の先達からの指図を守り従う） 月　日　　正別当　本道寺 同　　大日寺 両役者

この立札の内容は、当時の同山中の聖域における禁制の実態を良く表しており貴重であるという。

ところで、私は歴史街道・歴史古道を2010(H22)年～2014(H26)年の５年間で7,000kmをスルーハイク（連日・連泊・連続歩行）し、旧中山道および旧東海道ハイクにおいて、３回ほど京都市の三条大橋（往時の同街道の基点）に立ったが、そこには、図－７―――2013（H25）年5月20日(月)撮影―――のように京都御所の方角を遙拝（ようはい）する高山彦九郎の銅像があり、とても印象に残っている。

図－７

（ｃ）斎藤茂吉

ご承知のとおり、茂吉は、1882年(明治15)、山形県南村山郡（現上山）の農家守谷伝右衛門の三男として生まれ、大正から昭和前期にかけてのアララギ派の中心人物である。昔は男子15歳になれば、今のいわゆる成人式（昔は元服）に当る出羽三山初参りが信仰習俗であった、図(表)－８のとおり、茂吉も節目で三山登拝を行い、その後の子供達にも引き継がれ、平成２年８月、茂吉に始まる４代目（ひ孫）の三山登拝を以って世代を繋いだ三山詣でが目出度く完了した。そうした中で茂吉が詠んだ短歌の一つを載せておく。

「　わが父も母もいまさぬ頃よりぞ　湯殿の山に湯はわき給ふ　」

図（表）－８

年　代	内　容
明治29(1896)年（新）７月	茂吉（数え15歳）は、父の熊治郎に連れられて湯殿山初詣、玄海コース（現ネイチャーセンター経由）を登り、湯殿山のみを登拝し、同コースを下山した。

昭和3(1930)年 （新） 7月	茂吉47歳、弟・甥の３人で出羽三山参拝。玄海コース⇒湯殿山⇒月山⇒羽黒山に参拝した。
昭和5(1932)年 （新） 7月	茂吉49歳、今度は長男茂太（数え15歳）を連れ三山を登拝、岩根沢から入り、月山⇒湯殿山⇒（田麦俣・名川・手向）⇒羽黒山に参拝した。
昭和36(1961)年	茂太の長男、齋藤茂一（数え15歳、茂吉の孫）も元服の出羽三山参りを行った。

４．民衆の信仰の証

吾が町内会の「(上桜田）月山神社」の境内には、図－９上のとおりの石碑がある。出羽三山神社の宮司を歴任された阿部良春氏はその著書「出羽三山の信仰と伝統」の中で「全国各地に現存する出羽三山信仰碑の殆どは“湯殿”をその中心に刻字し、向かって右に月山、左に羽黒山が刻まれ、しかも中央の湯殿山は一段と大きくなっている」と話されているが、そのとおりである。なお、図－９下は、山形県鶴岡市湯殿山有料自動車道入り口付近（旧湯殿山ホテル）にある湯殿山単独碑である。

図(表)－10は、「西川町史　上巻」より転用したものである。同表において、「うち三山碑」は図－９上のような碑であり、合計からその分を差し引いた数は殆どが図－９下のような「湯殿山」単独碑である。

なお、全てを網羅した完全な数量把握ではなく、概数であると注釈されている。同表においては明瞭な特徴が表れており、山形県内と近隣県では、三山碑が殆ど無い、つまり、逆に殆どが「湯殿山」単独碑である。ところが、遠県では「三山碑」が多い。

御山（おやま）の近くに住む人々は三山の状況を把握しているが故に湯殿山信仰が深くなる、一方一生に一度くらいしか来られない他県の人々は、三山全部のご利益を蒙りたくなる、という心理なのではないのか。

いずれにしても、湯殿山が中央に配置である、今世から見れば、遠方から一番目立ち標高の高い月山や出羽三山中核の霊地御本社があった羽黒山は威張れなかったのである。湯殿山の御利益が如何に大きいと思われたのか。人間を写して（重ねて）いるようである。

図－９

表５　出羽三山碑の分布

県＼年号		天文以前(～一七四一)	寛保(一七四一～四四)	延享(一七四四～四八)	寛延(一七四八～五一)	宝暦(一七五一～六四)	明和(一七六四～七二)	安永(一七七二～八一)	天明(一七八一～八九)	寛政(一七八九～一八〇一)	享和(一八〇一～四)	文化(一八〇四～一八)	文政(一八一八～三〇)	天保(一八三〇～四四)	弘化(一八四四～四八)	嘉永(一八四八～五四)	安政(一八五四～六〇)	万延(一八六〇～六一)	文久(一八六一～六四)	元治(一八六四～六五)	慶応(一八六五～六八)	明治(一八六八～一九一二)	大正(一九一二～二六)	昭和(一九二六～八九)	合計	うち三山碑	パーセント
青森														1	1	1					1	7	2	2	15	14	93.3
秋田		1					1	2		1			2	4			2		3			1			17	10	58.8
岩手							3		1	2	1	15	7	10		6	6	1	5		1	32	11	5	106	70	66.0
宮城		1				1	1			2		12	10	4	2	7	3		5	1	3	15	3	1	71	5	7.0
福島							1	1	3	1		3	8	4	2	6	4	1	5			7	4		50	4	8.0
山形	庄内					1				2		9	23	8		6	6		5		6	17	3		86	7	8.1
	最上											4	3		2	1	2	1	1	2		3	2		21	1	4.8
	村山			1		2	5	5	6	32	7	37	27	22	6	18	4	1	3	1	3	5	1	1	187	3	1.6
	置賜					2	1	1		7	1	31	31	17	4	16	5	2	4		2	26	1		151	2	1.3
新潟												2	3	2	1	5	1		1		2	4	2	1	24	0	0
栃木		3	1		1	1	1	4	1	3	2	11	2	7		5	3	1			5	3	1		55	1	1.8
茨城		2							1			3	1	2	3						1	3		3	19	16	84.2
群馬														4		1	1	1							7	7	100.0
千葉		3				4	1	3	4	7	3	4		9	2	9	7		3	1	1	18	11	38	128	122	95.3
東京					1	1		1				1		2			1			1	1	2			11	10	90.9
埼玉						1		1		2		4	3	5	1	2						1			20	17	85.0
神奈川								2	1	3	2	3							1			1			13	11	84.6

図(表)－10

５．出羽三山の標高

その１；湯殿山の地形図における標高を見ているうちに問題意識を持ったことである。2017(H29)年11月１日現時の同三山の標高は図(表)－11中㋑のとおりになっている。中でも湯殿山の標高について、出羽三山神社のホームページを見ると国土地理院と異なり、末尾が「4̀」(㋺) に揃っている。現在の湯殿山の標高は、地理院の電子国土地形図を確認すると1,500mである。そこで2017(H29)年11月9日(木) 同社社務所に問い合わせた処、意

図(表)－11

	現在の標高		以前の標高(大正・昭和初期)
	㋑	㋺	㋩
山の名称	国土地理院	出羽三山神社側	国土地理院
羽黒山	４１４	４１４̀	４１９̇
月　山	１９８４	１９８４̀	１９８０̇
湯殿山(山名)	１５００	１５０４̀	１５０４̇

図的ではないが昔（以前）の標高をそのまま引きずって来た、と言うようなことであった。しかし、穿った見方をすると末尾を敢えて「4」に合わせたく放置して置いた、とも受け取れるが。

そこで、山形県立図書館に出向き確認した結果は図－12のとおり、昭和29年のもの（以前も含め）には「1504」と記入されている。なお、4は変形しWにも見えるが、等高線記号とも一部重なっており、間違いなく末尾は「4」である。なお、この「4」については同館の図書館司書からも確認して貰った。

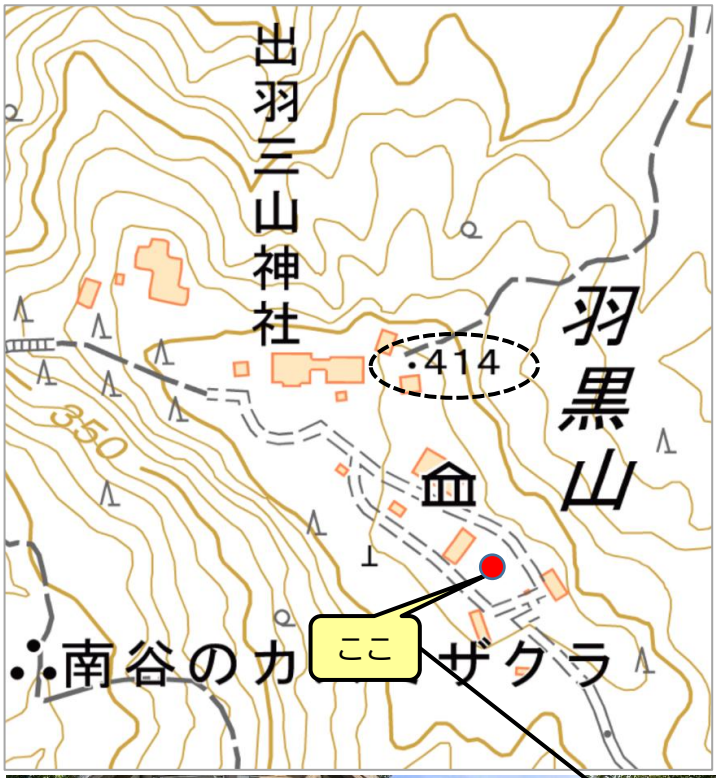
さらには、羽黒山、月山についても大正・昭和初期のものを確認すると図(表)－11中㋩のとおりであった。つまり、以前は同図表㋩であったが、現在は㋑のとおり。三山共に標高が見直されたが、これは測量技術の進歩等により標高が訂正されたものであり、ままあることである。

私としては、同社ホームページに書いているとおりの下一桁目が「4」で揃う今のまま表示して欲しいと思っている方である。「4＝死」と重ねて、出羽三山の擬死再生、蘇（よみがえ）り信仰の霊山に真に相応（ふさわ）しいからである。

図－12

その２；　羽黒山の山頂とはどこか。

出羽三山歴史博物館学芸員によると、図－13上図の「ここ」のところ、同図下の円内にある－－－ただし、三角点はなし－－－とのこと。しかし、同図上の国土地理院地形図には同社合祭殿右方霊祭殿の所に標高「414」(m)の数字があるが、果たしてどちらが正解？



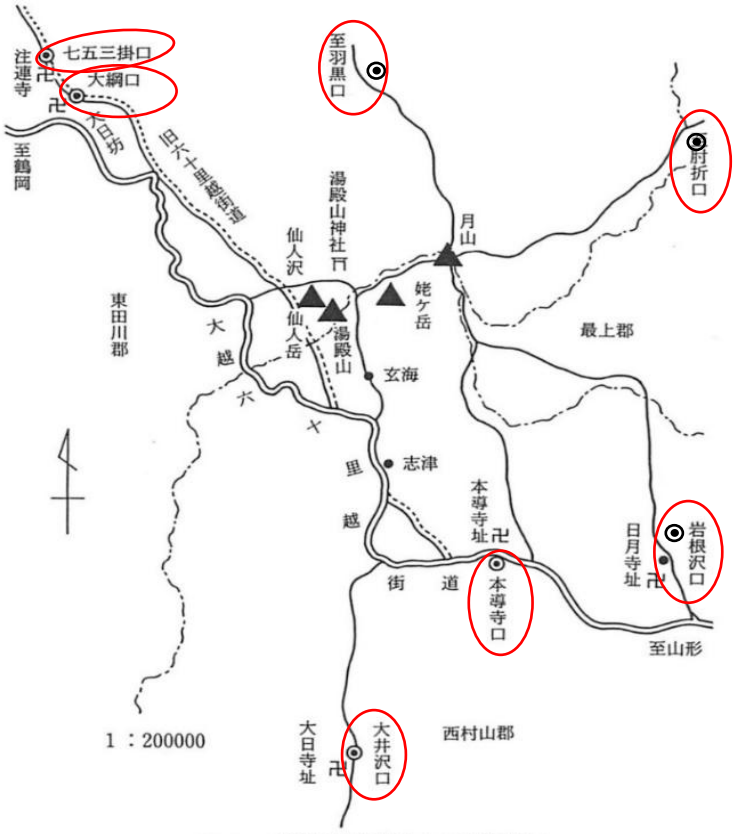
図－13

6．「八方七口」と言われた登拝口

江戸期には山麓に「八方七口」と言われた登拝口が存在していた。図(表)－14は「西川町史　上巻」より転用して整理したものである。（括弧）内は、明治の神仏分離以前の寺院坊である。

図(表)－14			
―――――	七口と旧社寺名		現在の社寺名
羽黒修験 （天台宗）	羽黒口（寂光寺）		（廃寺）
	肘折口（阿吽院）		（廃寺）
	岩根沢口（日月寺）		（廃寺） 岩根沢三山神社
湯殿山 別当４ケ寺 （真言宗）	表口 表別当	七五三掛口 （注連寺）	注連寺
		大網口 （大日坊）	大日坊
	裏口 正別当	本道寺口 （本道寺）	（廃寺） 口之宮湯殿山神社
		大井沢口 （大日寺）	（廃寺） 大井沢湯殿山神社

また、図－15はその登拝口の地理的位置関係である。



図－15

湯殿山八方七口の登拝口
（山形県総合学術調査会編集『出羽三山（月山・羽黒山・湯殿山）・葉山』）

〖余談〗

ところで、八方七口に係る派生について。出羽三山仏教系（荒澤寺正善院主催）の山伏修行「秋の峰」において、「七峰八沢」回峰行がある、この七と八は、文字の順を入れ替えてはいるが、八方七口と通底し、曼陀羅の世界観から派生しているとのことである。

七転八起（しちてんはっき）（ななころびやおき）も浮かぶが、七と八を使っている意味合い（根拠）は？　「七」と「八」は数が多いことを表し、転んだ数よりも起き上がる数の方が大きいのは、仏教のある説が由来だと言われている、誕生した時は自分の力だけでは歩けず、周りの人に支えて貰いながら一度立ち上がりの姿に仕向けるが、この一回分を含んで「八起」となるとのことである。

「中国神秘数字（青土社)」を参考にすると諸々有り、私が思うに、唐突だが、七については「北斗七星の七」、球体空間要素「東西南北上中下の七」ではないのか？ 八については、「易経八卦（はっけ）（自然宇宙界の種々の属性を象徴化したもの）の八」、「八方（東・西・南・北の四方と、東北・東南・西北・西南の四隅のこと）の八」ではないのかと思っている。

＝＝＝

【しめくくり】

出羽三山に触れる中で古神道や密教（仏教）や道教や陰陽道や易経（えっきょう）や陰陽五行説などと習合し熟成されて来た歴史を学ぶことが出来ます。現在の中国の政治制度に対する評価は別として、日本古来の自然崇拝の原始信仰に、中国伝来の諸宗教を集合・混交して来た歴史的経過を鑑みるに付け、吾が大和民族の偉大為る寛容性に感嘆するばかりです。この娑婆界・この世においての人間関係を営むものの一人として、私我の牙を研ぐことに汲々とする人間を見るに付け、それ自体は「分別知」の争いであり如何に馬鹿らしいかということを気付かされます。本来は「無分別智」の世界があるのですが、気付かないのです。地球上50億（大人60億）人の人間がほざいた処で所詮は感情動物の叫びです。その道で飯を食っている宗教家という諸人に出会って来たが、８割は胡散臭いと感じました。神・仏・キを語って、神・仏・キの皮を被って、その実、言行不一致の輩でした。

また、生身の人間は妥協と打算の継ぎ接（は）ぎで繋がっています、それを時には“絆”という耳障りの好い美名で傷を慰め合っているに過ぎません。やはり、崇高な究極の教えは神・仏・キにあります。純粋な神・仏・キの説教は人間に押し付けて来ない、人間を限定化しない、人間を脅迫しません、好き嫌いの感情で人間を仕分けしません、裁判官のような人を裁く教えはありません。人間個体の自主性・自由、個性を最大限に尊重します。だからこそ人々は神・仏・キのありかを求めて参詣に足を運ぶのです。知識偏重の頭でっかちではなく、自ら自然に溶け込んで、自らの心身を投じてその中から人間の正しい生き方を訴求して行く活学の実践者を尊敬します。こんな雑感が浮かんで来ました。

（end）